



50 60 70 80 90 1700 10 20 30 40 50 60 70 80 90 1800 10 20 30 40 50 60 70 90 900 10 20 30 40 50 60 70 90 1900 10 20 30

50 60 70 80 90 100 110 120 130 140 150

50

10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 110 120 130 140 150

50

900

10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 110 120 130 140 150

0 30

繪本

鈍亭主人著

一栗一代記全

一盛齋芳直画

忠勇小栗一代記 全

總目錄

- 第一回 小栗助重横笛の妙手を得んと欲て禡を詣
第二回 照手姫金龜山ふ詣てもう一度助重とまつも
第三回 助重俄鬼病とうり熊野本官ふ温泉浴
第四回 照手彦漢ふ謀く萬屋が三井家
第五回 善惡應報忠孝貞操本懷を



狂言綺語をりて勸善と導か談笑諂諠——と懲惡と
諭をと宜き哉經典儒教の大声ハ里俗の耳に入らば
小兒の病を愈す小良藥ハ口ふ苦く熊膽人參ら
高價タゞも彼聖教の解難が如くとぞりく口當う
みたる飴を越らせ良藥小ゆるとりく熟論ふ聖賢
の貴き教ハ良藥小ゆくとぞみたれ史譚ハ太白人の藥
飴うり贊語の中小勸懲の意を表し自然五常
道小叶へるをりく小說者流の心要とを作者の用心
こそりべ一然りく雖余が如く未其意を貫通せし

強小戲墨の僻あり我子へ免せと諒せし入先似ぐくも
有ら候ど此病あり類うるん矣今あ寔ふ刻成の小冊ハ友
垣何某の遺稿うるが首尾全くせし稿中ばけて箇中あつこと
既小久一時至りて書肆の主茅屋小捷乘り校セ希多^{シテ}書之
彼入作意よと雖看官の讀小飴を是小文ナほ圓を重て
慈童婦幼小見安^{シテ}あらんと蒼卒小補終^{シテ}是を
あく所謂蛇を画く足を縫^{シテ}の業小やあらん



小栗満重の娘子

同苗十郎助重

後小判官代

平義氏



天の照々さる善ひ福一
左の禍もといづ古詔を

今宵一夢雲も

魯文賛



横山の養女
照手姫



小栗助重英雄十驛

丹岡加太郎春教

田辺平六郎
長秀

同
加次郎
春高



地ノ庄司
助長

田辺平八郎
長為

風間二郎

正貞

美登小太郎

為久



後藤兵助 助高

後藤
大八郎
高次

風間
八郎
正固



小栗一代記全傳

江戸懲獄 銚亭主人補綴

第一回

人皇百三代稱光院の御宇足利室院殿義持公京都將軍の頭應永二十八年常陸國の住人小栗孫五郎滿重の嫡子十郎聯重との者都より兵練日馬へ薦近郷ふきに文武兩道不頗秀才ありて未だありた若雄りき一歳宿願のとてありて該國下總の國相馬郡布施村より舟才天へ系脩ひしそのあとに社家お通承りひるはれをひく秋の舟船を駆け冬うそふ御宿の川面ふまくとあらひうる心耳も澄て塵外仙境の如ひひをほしりとまんくさせし御小居とゆめ櫻笛えり出一絃曲をきしらぬそらめが是が彦ふ千種まくと生の音を止めぬれの唇ひじきつさも森へくはしる己ものと無を優へす花とす所是川水饒ふ送渡て猶穂とうて中うそよしをうなぎをううのれれ出に氣として小栗の音ゆきとれ

さと深志ひに有折ふ小栗の仰く怪つともまろ笛の音と止あくの女うそトオむひ
そのひ身へ何人老をしませやゆ次とひ人うれ社家す事よりひくねばうそわ何
おぞ工廠をもそぞ間孤ふの娘、微笑つ財主さうと笑ひそ我身へ當所の卒
御うそぬみある笛の教曲底ふ軽て自然妙す、故衣つの象を產ねぬめ乃ぶ疎うそ
ぞううなうそば人ひしてば病わう袖横笛を体へ好そ、蘭室入での香妙を傳へと
欲をれども好そり必をひたひをくほめり遣ふんをひそ其の獨を引ひとまうとくと漢
か例そくありて火憲少東儀を極めずとも功績力の時を負あうと懷僕ひくんと
思ひうそづくがむゆと遊樂じことをせざる山東ふきとまそ阿能の仙聖てそなうじ
見た笛曲の遙人うれへ名とびく後あらしくうそ巨細ふくは傳をうりべきうそうそ
奉もふぞく志て時手せきと伏せた却てその身の徳ひあり多くあらうるあれ
そとが度ふ入ふとくそーつとちすうち數丈の竹とろそて沂てえとびりうみけつ助童
奇兵の匂ひをほし始めて身の度するそくこをと過社の神前を舟才天女のか簾



まんと倭の山で腰すむ。社種おむろ再びて宿更下向ひてる後院笛曲か
心を連へひひそらふ要儀のみを極んりてとまふおんのそぞと院女のうらき
機を忙つゝああぬる道ふ心迷へもやく吉井ふ分合ふ木と移事され
のふねぎひて毫馬の縦豆さめぬつば人猿路の仕づく身移ふ道へもぐと
敵がふちむれ者せの身ふりへゆる仙人のあらうだやと山家ふらうう
本掛小内て居来むる者身者なりれば山掛へづく嶺ををさう山体ふ出あひ
あらぐと間うるあら山体され倣ふるごとの山は山危険かうく苗のあらう
あり御くま南朝後醍醐天皇の轍萬里小路若狭御邊遊へて仙媛不入
峰ふれりよしりけのまうると養へりれば小栗へさとそと崖崩して山体ふれせ
ひち別れつ丘をもぐる山多く山をつゞくへ道のりに嶮岨をうぢう巖岩が
つを離れて見青流る谷をとまうゆうしてひまきふくちをりあひを
ひき合ひせば雲懸したくひと蘭亭のまうあらをもぐひ樹下石とお草を

ほれその不意を待ひ難然とす。雀焚の異人ふる密うつ臘と號て名とむ
をうむとさづきまて山麓の國の住人小栗十斧助重とてる若冠者重
文武をひしむその間小路くわ探笛の曲ふんをほひへどもあそぶ所至くに何
能就跡を得入りのと年ごろ下緒の希施れり。おき天へ祈願をほひ不そひに
難安の苦を數つたうくと仙聖のまにまをひそひを近登山だり一備ふ余り
赤んをあきえみ和箋を假人あらじとおし極ひのぞもければ異人へ游ふ眼えひ
られ給て小栗をうちひそひ、おれくる助重我どふあひて波を衝てと葉ふえ
いふう狹曲を脩ざまことく免せべーと問律聲至仙の御神御とまく
せね。一くめきげととくうをあら〇こふ一毛武部少輔詔秀とおは
う。陽重が子十郎助半夜笛の附を承めんとぞおじておれへまくしまく
きゆうの既くとももまの、の争斗を企て來り秦れ山名因藏人氏治をうらひ
つ篠余の多額左頭お底給百人候もりん小栗一家の老君をうらひ



近國の兵を備へられ謀下小栗を征せんと向ひて不本意に附徳大
名、毛一色アヤセ輪守季山安内源人氏治井田井伊勢守時直弘一色左家食忠義
大井三郎氏光守人伊守時久信守左門利成殿同昇久於同嘉附於在原
景定をもよかにして本を田村守海守名那須守源三浦の子とぞ毛一色
毛一色近國の大名守れくともぞそくつその勢合五万余騎日の暮れに陸上
當區で小栗村の居城七十重火をあそりすがりそもく一色信秀グハ栗
の族をうそり立スとス企へやうるをどとくびゆ不系於の將軍義量公逃去す
足利の家姓にてみ侍臣臣へ尊盛公の仰命給其民公の條代りれの家督
とめの外相川守そくひゆを併へまひ一色義量公の子とぞ遷徳
さん教改名一色義量公の子とぞ猶家首下くければ一色性秀公不お邊^シあく
侍臣之に家教を承り小栗満季守く徳公とぞ弟一色面因を參るを多
ば已承於只管鑑小刀さんとのたぐみのじう心の侵本あるをかくの敵小栗加人と

これぞとて嘆く先小栗をしのぞて歎歎ひ端ひとぞぐんのととかく後言をとまし
たりする種小栗公のあらざりを攻める不協印をもすつて走もと栗井
小栗をもとく馬とひとに不協の指とかくした小栗父子の聲をぬれ條守とぞ
かむいづや冬の先以遠跋のか殺向かれたへりとく偏あぐく籠鑑家少佐
小江口とて不即れ無父子所謀哉あるべくと所便き人と身とくとく
かくく一族謀とて自害へうまくも宿志きん度二余とぞ上君の也あもとを
曉そくうが不即れ身と滿意父子からくとく謀手補一聲かく引被て身を頬こ
れりく親等とて一色とては深入わが修者のもの根を引負ひやのち乍く
自害候りとて酒をも大井直弘小栗父子が罪とてんとく殺しとく
猶豫とて身をれとて酒をも大井直弘小栗父子が罪とてんとく殺しとく
れりく裏火子の家ぶとうとぞ知るが故にとぞ御のは聲をもとく天高く見えと手筋脚
張りとて敵の東をとねつて立候小十四騎を切ておまひがをひとうとくとくの



然深林つゝりとれど軍の勢めにて兵の詰むる小栗等の弓弩をもてたる兵士に
あらずと近づくがれ満を持するを極めて都とももしく不妙びく内門を
おひき満を持す而久小栗等其處へ行奉候て六十精兵合計十騎を率
六十守二人の者此者兜の重きを覺え難を能く一馬毛の兵士をもて百五十騎を一
合備へ相井少因もうけぞ一色ば体へつけられ候秀もとを先途と飛じて之を
御重本懸を附られ既と小隊をと眞めに今よりの戰いの入るつて而諸
そろりふれれ散と馳へてひきあへて皆大井等と戦を満を持すと近づく
やう味方の軍あらわし射ひて被れつて敵あるばかりと夫う程不助を御堂用間
後成田邊化行思えどりて一箭當千の勇を發二十精をもと我をほしとぞせし
來方と助けれかくとが敵を犯體をつくべし小栗等も五十騎をもれつて令引不
可と拂ひよ告也後尔山房の狀ふうづかまく小栗等へ有無をもりばるに
正豊重義助を等儀ふとぞもと一矢字正とまつてつり死ねば誰かと
下船を泊入乱て戦ひりて皆の外不攻あくと色あく取
小栗が多度御の左司助長をもと大兵を次と表つてあけでたるをものとし太刀振
は一震拂石火とあらわればは勢ひ不獲余き跡小敗をもとて折りとあ
國村ハ多き上り敵ひ口づに小勢うるそひどきのくらひ往ふよとそく見ゆまとくス
船一舟に多き物をもとて山岸是はものまことてしてそがたび捨小栗等をも
んぞと組あらわく傍廻すとよびとくとては老健者らしき者からひの身じふ難れ
あはれ辭をあらわすは御多き御の手引あらわす山名ヶ谷の城りとよだの城を
もととづひ馬鹿の如きを極めぐらむとては老健者らしき者からひの身じふ難れ
多山石を生搬りし鐵金等の荷物底車等を走ひても山名ヶ谷の城りとよだの城を
あわせを發ひあらわるなり國本の事とわらまく右様な付小敗をもとしに御堂用間
の御が多きとまよてひは遙く小栗等を舉ひあらわすとみじて猪附あらわるを
坐場中へもあらわたり〇以てあ除うひふ軍とあらわ小栗の城中を發兵と事



首をあつえむ御ふ御とお前
さう都合三百五十三味方の討死を負ふてあふ
百人さう池の底にへ今日の軍ふ生捕さう歎ね山居
氏治を満重が前ふひきそんれは満重へ是をとす
自ら山居がさうめをとれ義を奪く山居小むら
アラハ宗君のいと萬人を殺す者皆居つまつる
取金き虚実のひくしもさく齊馬をむかへれ
あくとどくと一族凶歎と多くては滅亡へ近きふ
ありゆればとへ小堀家これすその軍功を
おほへなされ修者一色陰奏をめらる
ふかみてへ一族自害へさう君恩を
被トたてすくとんとの怨ひりゆふむむ



内陣陳あくとよしと御前は御す御多びをまろと洞をあはしてのをしへ山房
一色と同宗の老翁は小栗うん底別是ひひはをせり六一色ふあらむれを
波濤にて共小栗治す一委ゆどもとみのうさうそくさひのうを波門を出で御
ふ十补助事御外のみとて居ては今山岩が御をうるをめを途あととやひりん
のうにゆきとかひくる山房へ是ふあうえあうと満をう修むのう一敵
けれど勇族の十郎助重耳よりればもとと白眼波も修教の一人うねづとほと
きくてもその儀りとば是然もほと天ちか力をぬれに小栗う八郎のう中山房の
一駒馬をのぐ入兵年三駒きくとだ一その船も御手を觸れ今へ是近とやちりし
太刀をく立て馬うりどもと薦くる御手舟のうかへぬとゆれ血縁くみてとあけり
助重山房う首わら廢し一惣因みをあり又が幕ふねきるふ満手アラトウ大筆勢れ
鳴呼わやまくへえ東山房へ車うへ一色ケ傳本を傳とおひ彼と國をへら
都入り故ふ宮ち櫻をとれれを平義くダ羅タニ龍をくづりへあ麻さや一

とをあつそひ歌島それども育てずわざればうの歌を歌く御くね一聲と歌儀
あくアラスハ今日の歌ひ疋う二十分の傷利されば定かふん不くも雲はと御害せと
思ふう助重一人逝世不^止時運をもぐり傳臣一毛徐秀才音をうそ父をもぐ
一族のわくへ暮れのま高手能^いうすりけられぬ助重至をまくよりのうじううの
ゆべき切腹して命途の歌供つまうらとおひ死ぬう有様不滿をうねてやけ^レ相
波へ父が去禁をそひきは殊中老因害せば遺家の血統もく地主^ノ國^ノ心し
不^可身のうとさうへ歌子恩愛のまぐかせまく地主^ノ心し^ノ地主^ノ心し
せやけれど助重ちうとく父の去禁を遂きとぐく歌くのこれとす十萬の
御^ノ盡じきのきとくめての小門うり何國ともあく居ゆれりく城中ふはくう
人^ノ少^シ小栗孫立邦滿畫伯又助重^ノ正孝と國次前室門重秀^ノ郎重秀^ノ郎^ノ君^ノ
新^ノ政^ノ為^ノ内^ノ物^ノ助^ノ正^ノ院^ノ昌^ノ吉^ノ清^ノ正^ノ五助長^ノ正^ノ英^ノモ^ノめとして
之後十二人とゆふ火をうけて皆く生^ノ死^ノをも極^ノ火の法^ノ方^ノふくらう

一面の斧と弓じくと矢を以て火の手のあらむを伏せられりと敵中へ入り死傷を
ひそめしるも財重ひんをうけり足利左近の頭ね民衆に小栗一族をも首不
御選派ありて後金の内鎮ありそれくふ恩賞をそあらうけり急々小栗一族より
執權と権安房の憲實かんじつにて小栗が治まをうぐまくたゞひふ發毛序を
出でややく小栗ハ忠臣吾ニふくをもつてよしとふ満毛が父なる重羅へ
おき船の附人されば波とほじもろく歎息の声征罪がそれなりと櫻庭を邊
と小栗が深き怨をいわく坐をよし上をもすみど憲実也もひく後悔の由者
さまみづれ一色後金の國をもく處事とのうらをもく熱湯してみるる
が今度小栗一家誠ももとよりとす千鈞財重を被難かれざればぬと福井次第
みちづく彼をめしとくふ旅てくの上の一大事なり何卒承りてくらし
きりんのせとんと障とくとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよと
憲実を容ふ薄きと虎狼のんをくともくともゆくも悪様をくもくも

第二回

小栗十郎助重へ主従十騎父の送命しゆめい 慶永三年九月三日常陸の
居城を忍び出づ時を掛て上橋ふつも君の御勘定ごかんじょうひんを頼りのとそひがぞ
やに身をあひて後金のぼとくる候院堂といふとあらわしく宿泊しゆはくして居
づり候山大樹安秀やまとと名する都あり黒惡不道の者よしの前まへの管領氏光の
御子ごしの時計とき助重すけじゅうを慕う民間みんみやふしきれども馳欲はしよく狂見の悪わきを薄うすく雲の富
士浦ふじうら候若主人ふるよひ入り候す小武後山こぶし養女よめ小野人のの一人の脇者わきしゃて
容毛ようもうごくひらきな人ひとと侍歌連しがれん琴基書画ききしょげひのくもさとくらき女の手葉ては何れ
とあらわにかく天性てんせいがての武藝ぶぎふるよくうけんれんのぶ道術どうじゆの者ものとまつて
せひを述べりれども胸中むかうのふくろうのうへことよひて体藝術たいじゆがのうちふあれ端はて残
くよきをこそ人道じんどうをあきて物もののよそと遊あそふるをあらわすとくらひあらわさんを
をやまき者ものを詠うる所ところ照てら日ひ江えの御ご矢や方ほう天てんを伝だん迎むかつねあるを

まろびるくはる忍て櫻え女車下於とも本くや。そぞうは人騒へ
く死まふかねむじ。金毘山を傍つ定てやの下向也。痛かせして悉く
折りゆく跡。若士の三人づれども。種衣の轟声。

まぶしゆく一夢。まよへ合へ。浪く海く風くとて
足もあらまき。とて。鷺よき後の女づれり。そ

わ見えゆく左右より立き。ぐ動葉の脣角。

取に立す。の豊子の袖。もみれり。そ

せんの如の袖。そゆく。もみれり。そ

袖。もみれり。赤紫。の豊子の袖。もみれり。そ

袖。もみれり。赤紫。の豊子の袖。もみれり。そ



▲取に立す。の豊子の袖。
酒呑の者と。腰りと
下於立す。ぐそ



生て。天持あさる。作。う
たえきと。盈をと
一へそれば。等が伝ひの
侏。もあれをもひて。普通の
利益
を。を
と
さく
き。
の。武士の眼を
まく。まく
白眼。眼ナ
ひろく
ざと。の。お
地をうるま
ひと。おさん
直。まゆをそそ
う。まゆをそそ



うれり身とせんと假りるは、所もひくらのまを、揃ひてあれられへ振へあ
やとありそとを、假りておふれそとくま、篠ふせんともろかく、小栗十神
身すくれを、おとく、お天へさんけいの崩りを、女を、くらべて武家のまぐ
まきみさうの有様を、ぐく、小刀ひだを、よりて、一人の武士、大刀くわを、おもひだ
うへそぐ人倒し、れふかくろく、一人の武士が、ふそりお大きあげ何者なれば我く
が、慈山のこよみ、奇怪なり、景皓を、ざよと、一同、おおぎえらせを、嘲笑ひ、さよと、
おどもへ喜ぶ、雲を、うよよが、一、天竺、浪人、夷魔、から、仕官の娘の娘を、とくとく
この場の仕官へ、武士、おびがれ、人、國、敵、刃、剣、刀の、手筋も、取そらる。不業へ何事、
るや士へ、合へ、さざひ、武門の耻辱を、假する、あやうう、うるうと、優然として、胸、内、見
ば、三人の武士が、大、小、怨、り物、ひ、こそぞれ、それと、水の刃、拔、だに、差、後、左、室、うち
うれば、もや小あきる、うが、虫めど、血潮を、深、入、刀の、けづれと、傳き。然後、蟲
ねつあらじ、あくえ、蟲食の、がく、一人の力、うち、かくして、と、も、を、後、扇、かく
二貫を、用、ぐりて、もじり、こうして、心、自、ら、あきら、而、を、だたの、二、ぐく、と
うそ、ま、ふら、ち、せんと、一人の、相殺、おじら、うあげ、今、一人の、箭、箭、消え、で、因
り、ゆく、そ、一、よ、う、渡、逃、のが、お、ゆ、く、と、む、経、ち、く、と、お、ゆ、く、れ、ば、武、た、ま、祭
辟、湯、て、頭、と、施、へ、纏、と、さ、そ、う、雲、と、霞、と、迷、霧、だ、う、躊躇、ま、ま、ま、ま、ま、
躊躇え、お、お、そ、と、の、べ、纏、を、小、栗、御、お、う、小、纏、と、腰、と、腰、の、つ、れ、の、腰、お、腰、ら、せ、あ、へ
や、是、今、の、ま、縛、が、君、の、纏、の、小、勢、を、ある、う、假、藉、お、から、い、を、肩、お、た、く、これ
く、そ、ま、の、つ、急、り、と、そ、を、あ、う、う、と、分、主、に、強、氣、の、今、七、脚、お、く、れ、ふ、れ、と、ま、と、
の、恩、女、う、り、君、の、西、館、ひ、名、を、う、け、う、り、う、そ、て、邊、用、ひ、れ、お、う、と、氣、と、ま、と、
お、う、う、ふ、宿、う、れ、べ、小、粟、ハ、夜、宿、の、茎、うち、も、ひ、未、こ、ひ、處、あり、と、櫻、くの
う、え、う、う、わ、と、定、め、ね、身、の、と、う、り、女、子、達、の、う、ん、が、ど、う、全、く、と、く、ね、て、今、
次、お、せ、て、お、れ、の、け、出、所、お、か、ま、れ、近、縁、も、あ、く、す、ま、く、と、の、う、く、こ、ま、る、と
御、り、ま、と、あ、ゆ、く、の、ゆ、ま、れ、旅、宿、莫、べ、あ、ゆ、し、ゆ、と、再、三、宣、ま、れ、

そぞくもよづき

はう機役堂の

旅宿をあに

とひれてまへ

うやけと

○さとも

小栗助重人

機役堂の旅宿、

あめどうつ

家の仇う

一色が孫子

を振れども



※久次郎の實音をさくし

せあら中の後見兵助へ

小方の商人ふみをあに

大小者の館あり

こゑゆめほの後を

うめくとく

○よーも

荷物お番

雙つ弓

香具の教

おをよひ

うづくへと

繩子の教

おをよひ

東宮堅固か
うぬごれなま
ふきむけり
だくも跡く
ばくら
十枝口
郎素
それと
ふる
とあく
めく御食の
町々入こま*



さゝれとよばれば後屋へ

下船ふらははま

舟ふらねば候

うれしあぐくを

あさりひつまよく日を

ほくましくやえまく

のひ日とおもへつ

鶯との女遊う舞

形を足一

ありけむ桜山別荘

きることをかうこの桜山こそ主家

の僕一毛と幸りゆき一毛



かよへてお夢をゆくと心中ふよろこびつかてふせ入ありうたかへ様
のせすみかと復讐新作ちふくと鬼角く不け人多と物ぐれば兵助
の乗る日せ徳くゆて二名の者不かれひりりあ自兵助へそと接山う館ふゆ
毛扇わをひうだくへ物怪へてあり徳ふげ別敵ふみやづくさる因縁とくすぐ
兵助ふうちむうひそむ遊へ新舎中の武家町へそぞちを驚く業ひあま
地ううん様状坐のわたくしも出へそくの有りうやとみゆあくびふくらがゆ
あだ名くきりか跡重のすなせこもわづりやとお後屋へんゆか難をき
うさんふね院坐の近辺のそりかく離ひふまつうれば何がそのくとあくね
くねされやとこあくふだ田舎をりようて声をあくあさうされべこゑと
間合からとくに他去へ雇用うり別業かくらどくの辻ふ旅宿せるうきくの
浪人をくわくするをと再び附きて兵助へがむすむれりくじくとまわさ
かえらるるかだ因毎の声とまきをうさればそむく刻べゆうば翁さのもの

便矣たり。彼人等々へ内附おほくふかく厚くも禮を述べられとみるべへの事の
いふまでも、今更ちららそきしうりその爲へ主の娘照手照眼の爲りて
のうるさくふ搜藉らむせふせありて、主従を含みふびじひと被す。あづげる波人本を
とれ、船をひばり多く候をえなせばあくど念ひふねうつ。伊東いとうをもと
この人ふゆき、今人とのありあつふび玉臺ぎょくだいをもみけとぞとあくまつもつ、もーー通
を無助むじょふゆく林はやしりれば後ご度どへさうそく是をうけひて、横山よこやまが御殿ごてんを立たてて、旅宿
ふ戻もどり主ぬしなり助たす奉まつかく、うの御ご恩おんを懷いだかむ。御ご事ことふゆき
あや助あすけ重おもへまなくうち、牢らうを送おとり候まつ。うの御ご恩おんをうけ、
石いしふあやうれをあくられ、ふゆきの腹はらをさよこまくとれを。うの御ご文
藝ぶつ筆ひ勢ぜめりて、累たまごと助たす重おもへまが才能さいのうをひきれつ。ものに、
りそらへまんく日ひこそをしゆり。○さうの横山よこやまが、照てらま將まつ、御元ごの田たを
えうひまくらうざのあやうれを被はり、情じよう人の作家さくり和わきーよしあれらの

兵ひょう小こりとて、人ひと不ふか零れい細さいの兵ひょう脚あしを、
バキばきありて、不ふかりひつ、あ浪あな人のけざらに、風俗ふうぞくのミク文武ぶんぶ。一いつに、要いまとたまたまその
系けい圖ずさうりあるると、兵助ひょうすけが佐させせと田た海うみうつもきて、化か女子じよとまれて、人ひと
更さらの震おどのふくらくらと生滌なまなまの生なまと走はしゆく、參さん々さんさんとひきよひきよとふああづれ、今いま一いつ日ひ
參さん人ひとこのおとづらおとづらだらひだらひとのえとえと、赤あかんあかんをあきばやあきばやと、鶴つる小こ栗くりごとのももがひいて
あくへ燕尾えんびの衣きふ体たいうつくに、一いつ前まへれは、猪いの元もとの田た每まいへて、毛けをすくすくり、東ひが具ぐ、
の兵ひょう脚あしを待まつつ、難ひがいとあつあく、小こ栗くりがえんがえんて、うけうけ、
助すけ重おもも本ほんねり、猿さる野のを、
からへうれうれる、參さん父ちちの横山よこやまへ、佐さう一いつ色いろと、英えい食しょくを、
のふせりと、廢あきら不ふ復ふく、ふくら運うんざらかざらかと、あひて、
忍しのいあふ、秋あきの數すうを、まきて、酒さけと中なかとぞうぞうとあく。○されば、馬まを、
山大さんだい猿さる安やす秀ひでの男おとこを、もくら五ご人じんあり、橋はしおとを、舟ふねを、舟ふねを、
山大さんだい猿さる安やす秀ひでの男おとこを、もくら五ご人じんあり、橋はしおとを、舟ふねを、舟ふねを、

りよは二人の兄弟ハ父不似ぞ狀の惡逆なる事と曰ふ人を以てあらうニ神安武
 四郎安高五郎安長ハ父不似くぬ倭兵也於智也傳兵也人ふうすまひつ笑々
 惡意をこもれりる照云那ノ横山大寅子ゆあく度才才の時陸奥より人賞づれ
 きたるを御十二貫文小實もり客船築れまた生長の三郎安武グ事せんと
 善ひよしひが今年二八の妻をむく一松み二郎とゆゑをと婚禮儀を照云那ハ二郎暴惡をうそさうふとく見んせざりんれば横山大寅のう
 扇え谷の別荘かをくこあを一ヶ日ごと櫻花堂の邊にて旅宿せら唐人を貿易
 爰ひ愈てすゞせりんきくゆくゆくゆくゆく殺さんときどひうどと二郎安武
 これをさきめて父もひし家をへりてありてくろ櫻花堂小旅宿せら僧人の食
 せうと正に一ヶ日がれへちゆの小栗大輔男十郎助安とゆる名はしまめのふぐ
 おあり氣々とく一色仕事ぐのようないへりのものあればとぞうりよせ
 てわざとくとんとくおひゆのれゑ半崎の郎堂ありてその強勇をれ
 がん



後藤兵助一ノ用物賣子
谷をあら樹山大寅の別荘ふ
入る事ある助重と照云
がん

はにゆふる易ひ

かる時が元をもて

痛をあらむつ

萬のうづく

身をば囁き

にかき



あたは様半をうそ小露あと
ふもとと御みんての匂のりのを
とるうやう我ちみまをうそとそ

父と寝ふきくえあつ

日小栗グ

旅宿だ

さて

使者ぞ

つに算木

まことひみを

助重ひを横山の
暴風をあらとりするのめぐらむ

へすべひぬく一色がまだあるのを
さうかと十日お峰合は横山うちへ

例はをもれを辭そひければまた



そのひを横山

の一族父五へ船を舞
とさりを舞ひみくろ

けれども

十八の

家臣

十人の

家臣

△ 目次

やうととてここの機のこよ一定の基馬をもさへ以て號だすとて是
夷に殺されるとあらずしてそぞ入る者を食ひたゞく砲殺一も魚ふ逆
りのまじめざるせんじて裏庭あるる庭はつるに轟くかそむて寒衣
をとおつけたりニ郎寧は又ひゆうるる庭のよこそひうれす難子はまたし
寒衣を小助雪をのせ食殺さんとひもとまな大根へおほいと小栗を噛逆筋
鬼荒毛を引ひくつらうむれのをうちの御えどもうと強ひふまくづ
さうみぐく鹽井へ軍のせ急々あがれ考もきつて傍れうしん一敵のうと定せ
くと金矢を手を小うひゆくとく役立とくあげ寒衣のそべり
荒毛をとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
コトのふあくとて縫るあがれ考の小栗をまつてちまち助雪み向
由ふたうそ養盤の下間不の由縫くの世を繋げば後山へ子をばかにし
あひきくわらうさすが三年の傷年も重機なりふを安民へまくあキ

鉢斗をぬくびて毒酒をりて害さうとのけをと郎次郎ひさあく不候か
とも大侯三郎あくとれをはりなけれ取縣へうへことを照きうえくかくせうり
さも毒酒か併義をとすりれた後をうつり小栗主役をはつとく所小栗家
ふかひけりと始めいたのほとひ一十人の郎康同席をひのむくろをう折
しもかうこの山よりと貢穀のうさんふうり止て横山う産あり筑山を邊際
産業生はあらね被看をうかれてとみにいはし猪をあらうてあひ食ひなれ、門分
はよと横山へ三郎は用くそをとて毒酒を小栗ふ追あらうあそ思ひの本神社
布。おもとよくと始めの志尼ひくせんとんの松例個りてはるるをさを
おの節の奥の玉川の水と接え一喰ひけりとぞ助雪へきことそもかく表か
あくとよくと於こアリ。盆の鉢をうそ小栗の事裏のうえにとて「あ
あくとよくと於こアリ。盆の鉢をうそ小栗の事裏のうえにとて「あ

狂亂を爲め事にあつてはまう殿ちひは奥からみゆく今ふたりひぢやう
てかえとそぞやくの義子をへ入店までまう鬼廟もふりくまとおがり
きりくせんのをじりのとと郎安氏をくわあくほふ毒酒の轟をその侵取て
あつくるふ小栗へ報さす肩をうけとま御教をあひそなざれとモ助重見
むたまよしに一さんふうみひし行方報れをうりあけり助重の郎安十騎の男
士へ猪をまとうふりふくらうふくらの席ふきるふ主する小栗へ廣公せん座者
あれで探監狼藉あつてふくらもあらされぬ云如何生主へ何ふと怪むとぞ
猿山先手きの者ひきうれましく云立十人をもつとまれやろく小栗うまび
のめんく汝ありかとまうを汝有あり小栗十卒助重へ奉未被逆の企あへて左
陸の居隊ふとそ轍り縫合はう強と而故とまうる居戦者うとあよそじ
ひをと一をなようあての因我黨の係形をと色ふこととをふしにまく毒酒
とりくじのふくれハ汝らのう程勇あくとも主ふまわれ一相撲あまくとぞ

せんと繩うれすむひひうへおとくんと大吉とふ駒これハ十騎のめんく嵐が
きをほく宵をともりうひ抜つれてあるとまひひうられへやうやうのとすおとれ
と下船をうこくうそめれへん得うと半唐土八方へ眼をくわうたまうつすとぞ
うまうく廢帝主義の荒うゑく三郎足牙辟易へくじかの夢云假のやうば
う叶忌と二回小栗版とて引ひうそくを何れまそとひきんとそれを池の舟河志
を一と止めかく隊伍のあましあるま人の容面もれそうもふく入をと思
みきりう若猿山ら居ふくられぬよふきとまく再びあきて被駕父とをもん
みせんすとほくらくへくとほりゆ水を小井料後甚だ火をせまくうと左司
ふむか主ある小栗處へ督修務れへ人ああくらうぢれらの僕の毒酒あ
うやうくよくまれぬふまくとくふは拂はせぬ矣うひへうらん我くも先とて
あまうをもとて後日伴駕を変そとまくよりも因辺平六をもそぞう
實ふりうともなるをもとをもとをもとをもとをもとをもとをもとをもとをもとをも

第三回

小栗助重ハ今日横山の

虎口をのぞれ東海道を

葛沢の清淨光寺の現住にし

淨阿上人ハ母さの伯父

うれべうの鹿毛ふね

うらぎまじめ

うらふねきよひ

す上人ふ我面にし

今日の次外をかうりなるうわうて翁の

郎黨つるひまつり坐後事うを声候や

横山父子が西遊するうの豊きう貞操節

あぬ中でせむとみ

かくふこふこそ

落休まへ

うゑをせ

きふのく

とうち連ひもと早ひ

着脱はしておゆのまけの





摸山父子もんそびは、おをとべりの摸山がおうとうおもての摸山也。摸山
こそえすましまして、おもとじゆ船巣のをもたふらう枝と文のひがへさへき
船ひりふとく人まつひく人をりうきの出家の本家おもとや、おどりかくの
御さんをもくえの虚云うれしもの、おもとさきりふへー、神もいづく御さん
御さんあむねばあむがり破成かのとくとくくみびきこかまとの様
をうきよせつ公藝とく、城をうきて小栗主經の墓碑とぞえびりる。

○かくて小栗助重王經ハ葛波山の靈廟を立て、三河の國へ薦めり、世を騒
内の伊重ハ小二郎表氏と妻名ちう、三河不歸舟、おもての十人の郎輩とみあ
お居てのうきりて、後裔池園方をもとめり。○摸山と幸國へひてかゑひ
揚子をさだりて、長きやうる。○おもて伊重ハ小二郎と妻名ちう、三河お
陽介と、摸山の姿形をうさんと御言をかへとつらし時日と傳てあり。○
御手のうきり模山が故を立て、時三年安政、表氏と毒氣の毒とおつけられ

その折ハ何ごくちからうりしが日を終る程小栗助重をびうてゆふかなくけみうね松く
お松木(廻)西體(もろぎ)へ疫毒(えきそく)と傳ひてことほざくにもそぐれ、好男(この)殺
體(わら)の聲(こゑ)もゆのうて肉崩れ疾(めまい)病(めまい)をうれ給ひて、我鬼病(わきびやう)
人(ひと)をひきとひそめ番(ばん)のあへたお傳(つたひ)へもとくぞはせの入(いり)とぞうり。

○摸山の疫(えき)病(めまい)うる済向(よしむか)と人(ひと)へ諸國を絶(とぎ)たるおれ、三河の國(くに)もあり、よくく
小栗(おぐら)がとくおがし(おがし)かへ、往(むか)へ經(きよ)者(しゃ)をうきにし、年(とし)ひのちあつたふ小栗(おぐら)
難(なん)病(めまい)をそくのうきらもあらざれば、二人(ふたり)へ薦(すす)めたり、角(つの)立(たて)より、わきて、浴
みくまのいのうは、年(とし)の薦(すす)めをうきる業(わざ)因(いん)ゆくこの悪(あく)病(めまい)をうけねりよ
とくの神(かみ)を志(し)むせりひ難(なん)病(めまい)の薦(すす)めをうけ、その事(こと)へか後宿(ごご)

お宿(ごとく)をうきまくまづ、おろき、曉(あさ)ぎの難(なん)病(めまい)の靈(れい)廟(びょう)を奉(まつ)りあひ、うけの日(ひ)

里(さと)人(ひと)をうち金(かな)くあうぐの事(こと)あへて、役(わく)日(ひ)止(とど)きに修(しゆ)行(ぎょう)うき後(ご)

北(きた)國(くに)のうきをひ出(だ)すありけり。里(さと)人(ひと)等(ほか)道(みち)徳(とく)をもき上(うへ)人の心(こころ)うきれ



毒風くさりがあつて死しゆする体からだをもしてや。脅わきらを檜山ひさん父ちちへとすまへ贈たまけり。葬くふるこそ家東いえひがしみづつけの隣海隣海へ拂はうなり。○相模さがみと武藏むさの國くにびきの。令波浦おほらあそぶどくをめぐせをかうる足あしとこのう者ものありなる。左近さこん老直おとうの本懸おもかるを本納おもかるの仁じんあつて慈惠海じゑかいの名なが毒くさりのあはれへ生うく。人ひとノシテ、ああざうりもあはれをああそびやうふえぐんよまきをかくまへ。老おとこアリ已あらが假あらうて、さうきくの御ご御ごめしきひのかくりてうづける。ある時とき名なへ秋相あきあいふせんとあくへほしてたツ浦たつうらの濱はより艦かん船ふねを出でし。解わかを被かぶは海うみ上うみを走はしる。身みも膚はも傷いたきく。時ときがへと一組いつぐみりとみゆく。せくぐがめりのあとと船かんよそろふのと轡わらげらればぢくとをきこゑひ。あぐつふことそのうふ車くるまをも葬くふる。女の死體しふみあめべあゆのまじと。朝あさはうづげお再び海うみへ流なさんと便たのしみこのれ難ひじりへ別人うべにんかあくば櫻さくら山さん。あふあぐあらはる。照てらすうりこの隣海隣海へ定業じょうぎの波なみをよる。

おとと年とがれの初はじづけのるの御ご御ご天あまの無儀むぎふやくちまち、生うをふきく。一里いちりのまきとあくみぞるへあどろひ逃おとげしと海うみ原はらと。船ふね中なかなれべ船ふねのうふうもうえく御殿ごてん佛院ぶついんの内うち名なをねへし。おんたへうづく。照てらすうり金かななくあつとせうやく小こ我わふうへり。だきつ。眼まなこをひく。あくとだるふ月つきへ雲くもをつみのうとあくとくふ懸けん。うそのおへまの葬くふつまれて船ふねを。おはせふはれく。洋よう小こ舟ふねにて。おふねお達たまへあくねとくに船ふねをあつひる。ハ船ふねをもとし。苦くる多たの三途みつの川かわまで。あくとく。御ご御ごの舟ふねをうるうと。早はやい。本ほん底そこをあくと。おもろふ一人ひとりの勇いさぎの子こ孫まごのうふおがくと人ひとをあく。よまとく外ほかをくわす。すくめてばせへ蘇生よみがへ。まよひうつ。声こゑ極きわくと。疑なまふらもむひのうへと。くる船ふねよ。自然しぜんの三種さんしゅ。者ものをよそひそひあくとまくねども。おも

わ模の國の仁にしる養女をうながすふらとまもてかくへ夷あふりけんか
ちうばむそとの御ふくそくそくもじせへりとりとあぢへりく廣やく谷屋一
をとめらどくそひくとくといけひふぞ櫻めぐみ入ふうち跡する深へ櫻ぐる堅を
きりそやくふん彦根櫻へそと櫻極めし櫻のそよる解をりへし
船りかうへ立よと疏ひきやれどかの櫻をえすふとれ於くらを
簞丈木舟た木うちえ浮る長の水をあがりとてをじしまくふれだ
そ人の情のこの阿く櫻ハ春風をくつれて赤雲霞小蘿室ちる船も櫻も
べき櫻もくらべてかくはりのく船はしもろ行まを船ひよへ一そめぐとそ
きげきら船へも船のふを船一脊せきるそつてかくはりてひ船をえまくら
そふそんごみたれをまの船とくふんまくらせゆふりうる伏坐てかくまで北
憂國を伏まくらみかんさううかぐと書ひふ余國坐て已う櫻みかす
かくへ所をもれかうざれ金灰浦をう舡をうくせせらる船を考る

あぢ、やひく一樹の新一先令賄へ乞へあひて一かをあひきもりへつまくそめ
上ふあるひうがおれにひるまひもあひじとあひしくひむちうそめくほんはく
まんをあひく伝じよひとあくもむねひふそくひびきこちをけきく
あられと繪をあへるそ瀧つ瀧田の風一舟船をりゆひまほうまひに瀧を
ひらきまきひまくわせをほしてわすれん門をくとお敵ば急瀧くも
轟轟とくく女房か若へ立ひたれも瀧もぐとくとくきくまく
わしふ身へ女房ふうむひ今宵とぞはあひて旅宿を離はせ程小
瀧ふるゑ茶とうちくと茶をこしす後史の仕事とぞうえとくのれ
あふくとえをもくはをひととノをひき逃す金の上らしく籠をすく
も久しわのをあせりてみ禁附のひの櫻の枝竹ふ火をかく御用事
ぐふ瀧を河原のどうくさの長へてれからうあひて門前子をだら
照れあふうちじうひくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと

生移くみぞ照ナハ西ハダ燃ゆてこ
まくまゐる今夕房のうきうを
門口ふまつてもまひとく

かわいはんとあひ

うをひくとまく

うとへ運きされば

あはへ服をまく

ありもむち



燃ゆて
ありひき

葉翁の下世

猪の寝人をうなづれば
うでくみくとまく
少毛君八郎の手
和さん面用を
うりきく
おはせあはせら



始終をうり
おもひ
うき樹と
今宵船中
おもひ
そ物とく
おもひ
おもひ



寝る處をしらゆきの精まくこれと飛ぶがひへ晴さうり野す
あじの書う餘まく腰際のあらふ痛ぬ後を拂ひせらゆくもくさ
をせ不憂るやふきくもおみとひとあは女子一人あそひき游あ
とありやと業ううづびてうるさくも前をゆかて虎難辺のき
くらば秋小宿りを来ゆりて晴れ次の日えときのでありじよば
再世の恩を報へ民善の心すありとひ乳母が前へふさんとく
新を出んとくころをあるじの恩みが極ひまことあらゆる事の至る
儀へあらあくあらうととあてふさひととおれが前へ用ひす
て大歎泣まぐまゐるうればまく今一と承あらむせよめへこれら
がととまであくまでまゆほん人の恩みが極めのうへ益世
あーく報ひゆのうへ承あらうとも我痛りよもをくせの豫
ゼベーと情ふうれありとがまがふふうりふたるのんまよど

寝ふその日も止りけり餘へ今日も入棚はよりまのひとく猶未
うきを渡辺をさへと出ゆくわとみ女房が歸は照まくものと
まよりあぐくときくしきと就寝あらきさざなれば程うづぎと
ありけうう害せんあととく云際のうへ壁眼へかくしてのとく
絶せーこととくふうりつ板へ走つぬぐうーの様のとく
うふ我すおをううての塵をみさうこまくうへ牆すくよ
さうおう居着を這ふくわどくあひあーさふきあひせく
廢の下へ一らえをうるのうらんとわトロ所へ御枕をうへ
腰をうへて腰眼でやうんとくわざく不隨ひとおふあせ
眼をのうへて腰眼でやうんとくわざく不隨ひとおふあせ
うだるをうへて腰眼をうへくせどまくふよへゆく
あくまのうへて腰眼をうへくせどまくふよへゆく

ありとくらひのくろきを洗うんでうちよりかはれ利根もあ
まきりと黒木をひらくしあげ櫛櫛ふるしきのとふ松葉をくぐ
りてうれべ櫛櫛へ用ひふむせりりてちよこのときやくすううらぐ
櫛櫛へうさくさくにさむるゆうちうみあがへつゝなまて櫛櫛しきあ
がぬみ垂枝の路ルをさせられてうらうた目ふあんごとくちくせ
りうる周囲スルぞとくまざのあふぬ色色緋緋もうこくよしりくび
ふりりか櫛櫛へきをひりかへそ黒黒かう敷敷をくらとあくと
コヤ女女よかのれへひぐくの櫛櫛緋緋也あくか廻廻一曲曲を吹吹く
その正絹正絹をあくこりて裏裏かせざまをほらのふれあはりだ
わをろくみとそまの肩毛肩毛の毛毛のそくとくとくの緋緋よ
一さかねれげひき巡巡古冠古冠のそとそそつもくくねくまく化化の
皮皮の尻尾尻尾をせそきて観覽観覽ひびの脣脣あくくに間間せん

ともちよすらぬはありて人燒火人燒火をそよきりぬぬ細鷦細鷦の
役役方方をもよもよとばせのれもくちキモくよもくされ
色色ふもれあぐ肉肉へ破破く血血液液の紅紅同同もうそくれね風風情情き
のくくふか宮宮が舍見舍見の服服衣衣の悪漢悪漢やう猿猿道道のうけ
ごくふけり大大はをとのそゑゑゑゑひのそくうさるりのきくきくう
今宵今宵も堵博堵博してくるもひのそへが方方へひくうて帰帰るお若若を
そめして下下ひまみても借借りのと賣賣ふあくく門門をりき
あけんとせいやどふ内内そそはうれぬ女のうき声声のダメやうりの
う行事行事事うやこたの遠遠うりあひひ足足をさうのまけが歸歸
ふ若若がみをうな女女を極極へつあげねまふそりびびつま痛痛
せうえううそおとみ合合ゆうばとかりくどもさのまじふ若若人人
苗苗ちうりうと接接ふせきをやと門門もうちや一わけ内内ふりれ

お名ハ人のゆづまゆ
みうち

あど



ひびくせう

んこく

ごと同れ

お名ハ才人ひき

眼痴よきかく

むちやくめい



後西皮もくちかへとまわくの黒ふ縮毛のパンとみこと
相佐うが家めよひり一ぢやんと撥が立まふのトミキリ
巻き立つてあくふを眼蔵へとまどりて持ま人の猫簾よう
簾を立つてみうらおきあそびくさむを御ふぞおはらへてらま
ち室あとかその方へ出でて御眼蔵へ立ちあぐり思ひて御簾を
うちかどなさぬごと外抱きゆを振る若麻ふたへうねく
路筋うほくであれけつがゆうやくあらうとき今深も知らぬその
人ふかく外抱きあべくと正泰へつけよはるくもくらゆうに同
をさんすのと家うかがふを福んとつてしまつむりく。わらく
りの眼蔵へ遣ひまうりて猫うで聲こづく。女呻まへうくふ
タマサマうさぞくしらうのへとくあくみは裏の書へてふ。屏
あまぐのあくみ被き被替ひと寢敷ゆうとまど寝のひのとる

をかひごくせつえんあらん女の足をあたこうろうと在の身、
あてゆうをとまくくまくゆくふ袖とくさせ用とくんで隣ゆう
きをりう。御ふ袖のゆうなつてが解てはだまふのつて身をく
ゆうとくせんばくひあくまくなあら山家ゆうが居をうてく
こゆう入りてあふきくみゆう家まで感をくく絲くまゆを取
り散ちあくえの散へをゆきあくへものまくす長政とせつ
たえ御へともあれこの家とへふくひ縫あり口しげとまゆでのき
こゆく人縫くくせにうてくわ瀬へひがくとよくくまゆとく
人の解をくわきぶんの衣をゆくゆく身を身へひくとく
まくゆくは家の身をうぐひくとく身を身へひくとく

先見く眼まなこのせめおのへぐざく家をゆけりをひこどる。
やがて旅のそととものこのせめあき年をかくとももみうく
ひざくらの處を一船をばうだらかう船はとのとやくんふ金を
散らしてそのやぐらふあづけしと見る。ふくらむうされ
とあまきみづくふ徳のふぞ脚筋あしあねへきくう鮮さもあくんく
ぐの難義なんぎを金派きんぱいふくふ徳とくがやうの敵てき敵てきを宣
くせ徳とくをうわどふよアが承うけをうめく故ゆゑぐちうたをあんへ
徳とくとも徳とくをうわ中なかみ徳とくをあれてのそくやくもうう
あうごの内うちへ船頭ふなとうのひくらむとくらむとひし家きやふ大魚蓑おおあじゆふ
うけくあくへさうのとくう窮屈屋きゅうくつやうともこの中うちへべくまむ
しにしが乗のくとゆくわくぶねあくぬゆりそぶんと魚蓑あじゆふをあ
くとくをくふそくうだくまくと魚蓑あじゆふもとだ眼筋まなこくわくふ

まみて笠の申まことを思おもせあくろ候まううち笑わらつこれを
脊せき負うて門かどをゆけ表おもてのうへ出でくやくくら眼筋まなこが来るる折
くら實じきの居ゐ子こをうかびゆふ入いて帰かふ若わかふ寧な徳とく一船を
うけくら情じやうある。云いまのちちがまませあざむきあざむきとして運行
つ。人男ひと小賣こまい人ひと入い金かなをせんりくろもへくまでもすきにふう
○おも眼筋まなこの魚蓑あじゆふの中なかふ船ふなを走はめ木きを載の家いえつまむのやうだ
小船こぶねふうらま六浦沖ろくとう人ひと費う舟ふねふ連つづんで三十金さんきんみぞうす
そくへそくの款こまの岸きしのうへ舟ふねをしのの莫まあくへも摩ま
ぬ氣きかく立たくの賭ぬののうへ舟ふねをしのの莫まあくへも摩ま
の款こま細ほそうりとりしうれ黒くろきへ大迎おほむか五ごとをきあくあらして
おがくへありうるをもくもくざくしとくくけらこう後ごまの物もの
うりそきれおをき興おき年とし假ま八服はふくふあざむくれ今いまか人ひと買くのよ



是源治へこの仲ふ礙をかう。一枚日済紙。——依方よりあまの
の美女を喫らう。日と夜と和ふ悦をうびて上方へみす。娘
むけあくの花里へうちうそであまとの女子を喫つてそのほ
ふ熙キシトロヘあまとの女のその中からひととき因縁の客毛
笑毛の庵宿不す。す。ゆる未だの名玉。置ふそまぬ泥中。蓮とは
源次とさうふかひし大切なり。さうして長法の國府をもせんつ
百万長ちうがゆふ連まきくさり。儂。豈。平。不。賣。ま。——なは
万金とづくへ旅人をよろ。旅館やうれば思ふがみめうた鳴
をえく大金かく男とく。儂。儂。女。か。ぞ。た。へ。り。す。あ。う。ト。長
お鳴へ賜ふをちうべけその虫性と同う。せど振ひまこと。代
き。居。と。居。處。の。ま。れ。と。う。よ。う。て。名。く。小。薪。と。ぞ。と。あ。く。け。ふ
妻。お。鳴。へ。熙。キ。ふ。む。う。ひ。と。ち。ダ。め。う。ざ。く。れ。ら。ら。方。す。大。金。と

もてわざとひとれば是よりこくふとくまくく寄人。うちの
おるの跡をふとれとうとくまげんととくとてまあやうふはとあると
移んじうふりじるを。假へ雨ふと。ほくへあう。の。君。の。か。ふ。せ。そ
とぐれどくとくで作ふ櫛を。とく男ふれへあれ。す。と。文。が。と。く。
ゆかばこの義たうへゆくせり。その金のかきあはの。く。よ
の。く。ゆ。く。と。と。と。の。き。と。く。り。く。り。と。と。ひ。き。の。く。よ
放せば長ちあうへ案ふお遠。——かをうやかくとりまとせ。思
まの小薪へきりれぞうか。うん。の。薪。へ。ゆ。り。き。せ。く。ま。く。人
が。か。せ。を。が。ま。び。と。と。も。く。あ。う。ざ。れ。ぐ。じ。う。き。悪。り。ふ。ぐ
つ。う。き。人。數。の。ま。か。と。く。く。ふ。く。と。く。難。れ。ま。く。——の。れ。ば。と。ぐ。
ありあくく。う。り。う。業。ふ。う。い。ん。と。う。業。さ。く。ふ。う。が。い。く。さ。く。
あ。も。ど。主。と。う。く。し。あ。ま。の。あ。せ。た。れ。う。も。そ。む。き。ま。く。そ

ふうりん
 情一のあらわれ食せ
 うてゆるともうさせ
 まへとおはのえ
 難あわせ
 ちからまで
 あかし
 あと
 算す
 あど
 あん

左 国府
 右 十面觀世音道



かくも後後はあらましの五更のうちで、庭庭へと出でてある
もよした人影のやうの業業内外のまことにありききをめ
あくおどりをめぐらすものもてたゞらうらうら小蘇さわさんを
推おそくする貞操じんとうをあくわざれをめぐらす

第四回

さうり小栗助重おだへ俄鬼おと病びもろく果こつ面おもてもくづ因いんからく
骨ほねもあくよふ人のこゝらもなくこれを黙だま等などうちよりて施行せうぎと人
のあせもられべのひがく車くるまみうちのせ越こし山さんとくらむにゆる
遙とおもくらむくらむあるのへゆくうだくふ題だいをひくふぞ日ひと鐘かね
夷ゑの國くに育いく來くしとくけいけいとも小栗おだのうち川かわや門もんには
あく旅たび人のとまうせひきとひきと能のうりうがくしもあまこのへるると
ちの人の御鬼ごきを車くるまのせ因いん者しゃ若わかまつて車くるまの後うしろの紙

ひきかわばほとやらんと立たつりて被は俄鬼おと病びまありけらう
えれを立たつりのそそづらへ鈴れいへ長ながちあつづるみのとこりもそ
ひきかわゆきととのえ母おやの底そこまくとも乳うぶをもむけぬぬせ
不幸ふしあふうちそだいへ母おやの喜よし顛たんのうめ喜よし顛たん人のうきごと
俄鬼おとの車くるまをひくふらべ俄鬼おとの業わざかつまくとくまくの車くるま
ひきかわとまくとおぎひりひりあそ長ながちあつまくまくあく者ひとれ
べ聞きこゑ小栗おだがまめまめあくせん影おとへがはせせせせそのさきの
納なめめへく上あ下さ。二日のゆきまきをひくべーりり小栗おだへたひあまうらうら
は、俄鬼おとの車くるまをひくふらべ俄鬼おとの業わざとさざまの助すけ車くるま
経きくの車くるまの聲こゑあく度生たま死しのあれね丈じよ一いつ手て又またの

若提^{タメ}あきらめ、金もうつみておもひへ三日を
ひきとしにまぬうりけることある

○さうも小悪の俄鬼^ヲへ往來の人の入り口で日を食を喰
やうやくお絶^{スル}き。解^{スル}教^{スル}の體^ヲが解^{スル}からくの間^ヲ。人
俄鬼^ヲを車^トうひ、五^ノ一^ノ湯^ヲかう^ス。湯^ヲかう^スへつれつとももく
下山^トあ^リ。あり^ス時^モ俄鬼^ヲも湯^ヲかう^ス。かう^スまことに
や美^シ氣^ヲうなが^ス。いつる靈界^ヲかへせ^ス日本^ヲもううら不^可年^老^ム
あざ^ス。ある^ス。二七日^ア大變^カむ^ス。お^レうした人^アあつて
こ^レ日^ア肉^ヲ喰^ス。ちう^スも程^アと^クうりき^ス。小惡^ハかく^ス。
我^ハふく^スよろとび^ス。ふき^スは^ク不^可年^老禁^ム。視^ム利益^ヲ
き^ムと信^ム。かの^ス一^ノうへ道^ヲたどり^ス。上^ノ人の道^徳をぞ
望^メ。十^人の^ス盡^ス。人^アもう^ス小惡^ヲあま^ス。よ^リ風^ア

候^ス。本^ノ宿^ヲ遙^キ。子^ノ庭^ヲへ^ス。ばね^トうり^ス。が^ス勝^トが^スかく^ス
とのを^カく^ス。あう^スこと^アが^スうら^ス。中^ノ山^アも強^シく^ス。ひぐ^スる水^ア
の小^ノ川^アと^ク家^アが^ス少^シ。池^アも^ク少^シ。日^アも^ク少^シ。後^ノ食^アが^ス少^シ
一族^アが^ス恐^カく^ス。減^カせ^ス。後悔^ア。自^ノ身^ア重^シと^ク死^セ。じ^テ
そ^レ世^アあ^リが^スは^シ。供^ト車^ア。うね^ス。ゆ^ス。そ^レを^カく^ス。國^ノ廢^ア
か^ス。され^ス。と^クう^ス。國^ノ廢^ア。少^シ先^達。處^ス。す^ク火葬^ア。り^ス
と^クか^ス。ま^ハい^ス。は^ス。是^ト。後^ノう^ス。かく^ス。つ^ト父^ノの^ス強^シく^ス。色^アも^ク
黒^シ。も^クさ^バ。是^ト。後^ノう^ス。かく^ス。父^ノの^ス強^シく^ス。色^アも^ク
かく^ス。し^ス。と^ク後^ノ山^アを^カ征^ス。と^ク羅^ス。金^ア。少^シ。事^ア。めん^ス。と^ク能^ス
と^ク往^ス。あれ^ス。十一^ノ萬^ア東海^通を^カ。し^ス。吳^ノ濟^ス。是^ト。國^ノ廢^ア。少^シ
數^ス。そ^レそ^レ。か^ス。後^ノ船^アを^カ。事^ア。本^ノ障^ア。と^ク少^シ。家^ア
室^ア。あ^リ。の^ス。う^ス。而^ス。馬^ア。少^シ。本^ノ障^ア。と^ク少^シ。家^ア

おとづれすからう 俄客船事を

船ひのこくへ

ひきうるも

足をやま

國舟ふ

まわぐり

轡まう

手ふ

くく

志

やしきらのどよく家の因と

経ちゆくにてあつけり



今朝へとせ車床うへば

ある土器のひのふらそむに

新ひれら走の取扱ふくはつへ

かく遊ば

僻る

人の

あくべくも

梨

とあぞ

豆が生めく

かくまんうのひく音のうえんぬを



まごとのあをまとにしがぞむちうろきどひよくに然うり。小栗助守
へ小二番難成と號す。長ち馬がてと車廻り。駕籠手。居合
居合そりて十歳の駕籠手うちむし。尾根と車廻りのよみの數湯
の毒をうちけられ數事あめり。射箭くびれ絆み。御裏やまと
うつるを駕籠のと人びたせふてかわみ。御者うちもひづれ
駕籠本宮の温泉ゆづく。奉書のけふれもう。下ヅスル
の通多く。軍人等がちあきとくか夷國の御用の御よりも。新
の主君は一人のやみ。ざらに。俄鬼庭の小車。宣教三日ひきよろしと
さくからくり。者うそのみふひととじあわく再世の札をもる
せんときあくら。お家のおじふくわく。この國府の郷をとつて
さんふれど。あくまで池の庄町と長ち馬のふこのを
きのばら。やく。承うれしくとくせられ。庄町じこにて。津か

長ち馬をよびよせて。鐘のをせとあうじとく。ほくわをもらひ
へのをさうる。日。駕籠の車ふのと。門邊をもぎ。はあを。をも
せうさうが。その車を三日三夜ひまう。と。みご。のをみ。て。とねらが
宿の客院の小屋とり。都と參。猪をもうち。もうち。とあつて
お迷ひ。仕立。をあぐ。船の次。ありれ。と。まうらん。と。わく。が。猪を
あひ。小薪をすひて。あく。と。つる。おぞ風の駕籠。うち。が。う
べべ。轡。も。角。も。か。く。も。ぐ。ん。が。麻倉の。ひ。か。り。と。く。お。ひ。す。度
う。の。ひ。け。の。と。長。ち。馬。の。小。声。ゆ。う。の。の。れ。を。の。と。と。と。
駕籠。駕。か。く。そ。ら。ふ。車。を。ひ。を。ひ。そ。の。れ。を。の。と。と。と。
ひ。ま。う。の。ふ。の。ん。で。う。み。う。グ。ま。う。と。ま。う。べ。あ。く。ん。と。く。い
住。か。く。あ。ま。と。り。そ。じ。と。れ。が。駕。か。く。小。薪。の。と。と。の。車。較
ふ。オ。と。ん。ち。だ。か。ぬ。の。あ。が。う。そ。き。う。あ。と。麻。ウ。か。り。か。り。一。三。人。



四三二
の小栗おぐりへ小義おぎをそぞ近ちかくよびらうづけそのやうへさがみ
みあそし騒さわめあそあそさうしゝうされへ小栗騒さわ動うごと
居ゐのそとまへば熙ひれの小義おぎへ助すけ重じゆうみとくもぐりそらつも
さいせんより君きみあさうおあくとりのとあくろふをひい
へども即そくくより黒くろ一醜う新しん風ふう微び君きみのんこもれこまひりくと
さそぐふ稚わらわがんをもくろもべやく云い葉はもひづくりあ
らせばあみんみつゝの我天がてんやとさきよら涙なみだせれあく
たくしおもだく云い葉はもく十人の郎らう黒くろともくふ
黒くろのんくのあまきよふ彌強みぢきこころもかのばくりく
余よ情じやうのなまごをりくわくりくをもくとくあうそ射の矢や
照てるふくろき二両りょうみきさうで敵てき敵てきみあくろて俄にわか
をとろりとぞだれと人のあくせみく鶴つる井いのすり

奉官の温ぬるゑと難むずびや平ひら食くまししうばこれより
猿さるくら小ちいとくつ化かをわろぼし家名いえな取と熊くませんそ
の下し向むかううう指さし轍じやく志しうぐとあうしことども物ものぐれ
ば照てるも小栗おぐりふくうれとよう毒どく酒しゅふあくう御ごくう体たい
みて卧ふ看くるを養父やぶ接つ山さんをくくひふて花はなふくらむそ
海うみふそとられ金津浦きん浦うら少すくな歸き歸きハゲ網あみふかくりく
そくひとふれそれよりうれが妻めぐらふ苦くるとあふ垂たれ衣きぬの難むず
きせられくうき同ひとあひーをその才才能ハこれをとそ
くう醉ゑりちふてその帰きを連れた人費じんの是原はらとくら者もの
み數うずこくされとの地ぢへ流ながせまくうつゆるト長ながちあうがひれ
とぞて傀まく傀まく女めのふくさんこりうとニ丈じやう不ふまをもすば
もありひよう孫まご七しち人のうち姓なまを失うしなて今いまをも継つる

こまへりてせよと女の操ハサグレじとこれまたのえさん
あんくをはるゝとさく物ハタケれば小栗ハシタの照手ハシタのまごころ
とその真操ハサミをうんどうめうりあるじ長ハシタをあつて大金ハシタをうそ
あぐりひーを振ハサハサるをときハサハサと僕僕ハサハサの身ハサハサとあそ
させざりしその男事ハサハサを稱ハサハサひくこれふとハサハサ千の葵金ハサハサ
をあくと孫ハサハサ余ハサハサ下ハサハサ向ハサハサ仇ハサハサをほろび一室名ハサハサをかこ
さが遡ハサハサ日小照主源ハサハサをむうひふ葉ハサハサにしそれまでハ長ハサハサもあつ
ああづくらさればハサハサめハサハサだきすとハサハサせふと十人ハサハサ
郎黨ハサハサみゆきらハサハサせ翌日思ハサハサふとハサハサれをつゞぎ足波ハサハサの
國舟ハサハサを立ハサハサて移ハサハサくとハサハサせりそだげ

第五回 大尾

脛ハシタふきと一色式部ハサハサ御ハサハサ鑑ハサハサは上様ハサハサ安房家ハサハサ寔ハサハサ實ハサハサの忠
賢ハサハサあるをふくくそ孫ハサハサをあくとさくとさんともうえ
けるを智惠ハサハサの故ハサハサをれちやくもさくー一色ハサハサ忠ハサハサ子ハサハサ
の始ハサハサ持ハサハサ氏ハサハサ公ハサハサ不ハサハサ禮ハサハサをうまく小栗ハサハサ一ぞくを滅ハサハサがうさゆ
をあらひあくと京都將軍家ハサハサへいひをくとけまぶす船ハサハサ
ありもその慶宴ハサハサをうごんをきさんとく船ハサハサふ
旅素ハサハサありけるあとふ一色ハサハサの忠ハサハサのあんく分離ハサハサされば
船ハサハサくとふりかへーとせくればあう等ハサハサと定ハサハサへーとば臨ハサハサ
やまくからふふくありびとぞ乗ハサハサりけりかべり財物ハサハサ
車ハサハサを英濃ハサハサよりひまくうか乗ハサハサと一色接ハサハサやとを
け船ハサハサひくありゆうぐこのをあそぶ競ハサハサいざ



天のあくへと後方より出来る滑代の郎黨をあつめたりひ十騎の軍士
先をもせその勢百五十騎みて横山を籠へと机をそろへてりうちの横山又の
儀ひとこあると大びお發す。やがて戦ひれど小栗をもてぬ他に國に生
後裔の勇士若小ちくらこそこゝそ一族全數也ろかうこよる處ら
さう後裔太八田辺平へ出だすのあひ助もうけたて横山と井安政
をひりとりけり。既に豈がへ大船船處をりけどくつうを所安政
二郎安春へちのともあくまづ小栗勢の中へもくさん入やふるす
と猪きりとをくり五人ふみをもとを太郎へそめゆめよとく
けきがこれまたぐりと二人の兵をひふきその故ゆて掛くねりく
をふり二郎が見ゆれ死をぞうするも猪きりと掛きてつぶし猪きりと
あひ西郎安春五年安長へ風雪若才ふうと毛けきが一色登場
も金くろ多きぬとをうなうと難解の發かやくとせあての小門だ

逃のびを助重あるべくこれをひそあれども、急詮番、うるをそ
うちうじをみ生捕と下駄をもせばト猪の角業をも見く。四弓
よりほめよとくが、後勢へのうれぬ事と玄関生でひげありとれ延び
もくせなるを、小栗の名をもせよつて、一色が首うちをし父を亡じ
か一族の仇をむくひゆるをみ強めと却無敵懲つきのまく延びをそを
他の庄司へしろく離を用ぐきくもれば二ツのものもくせふ
つては、郎黨主人のうれしをもるよる小栗の前からもくを
ざきゆく。後身、うるける横山大膳のうちとくべくとくを
悪人をもれ、貞操の頭をく斷り辭をもれへと落めとくて食をよ
アハ取ける。その際六十四才にて病死す。ゆきとありやくもく小栗
助重へうち附をと被ゆけたるそめ蔵山にさひき山からまくと
くううの栗の父の逃亡の道、一色登場をもちゆくほくと



上松安房守憲實不仕ひて

管須持氏朝臣（さとらうじまつ）小栗一家罪也

參者（さんしゃ）の考（かう）ふ成元（せいげん）のよう さるがま

タふとそあへえさうくさうと

持氏公（じし）も小

栗（くり）が罪

タだよ

どき

どき

どき

小栗判官助重

更（あら）平兼氏（ひらかねうじ）と称

名武驚光（むけいこう）

息女（むすめ）

照天姫（てうてんひめ）

海（うみ）後（ご）

をりされば

さうそく

横山の養女（やうめ）とす

再兼（さいかん）才嫁（さいよめ）

本領安堵（ほんりょうあんづ）かくせ

つみられ解（とけ）び對處（たいしょ）の小栗ふ

くちうり／＼冬日わくだ

家族（かぞく）國府（こくふ）おほひきたにし*



小傳

代　利　英　五　代　中
代　利　英　五　代　中
代　利　英　五　代　中
代　利　英　五　代　中
代　利　英　五　代　中
代　利　英　五　代　中
代　利　英　五　代　中
代　利　英　五　代　中
代　利　英　五　代　中
代　利　英　五　代　中
代　利　英　五　代　中
代　利　英　五　代　中
代　利　英　五　代　中
代　利　英　五　代　中
代　利　英　五　代　中
代　利　英　五　代　中
代　利　英　五　代　中
代　利　英　五　代　中
代　利　英　五　代　中
代　利　英　五　代　中
代　利　英　五　代　中
代　利　英　五　代　中
代　利　英　五　代　中
代　利　英　五　代　中
代　利　英　五　代　中
代　利　英　五　代　中

卷之二
續